

難聴のある幼児のことばを育てるために（その 1）

～指導者に必要な専門性を考える～

企画者	庄司和史（信州大学 学術研究院総合人間科学系） 松本末男（聴覚障害者教育福祉協会）
司会者	庄司和史（信州大学 学術研究院総合人間科学系）
話題提供者	庄司和史（信州大学 学術研究院総合人間科学系） 中泉貢一（北海道室蘭聾学校） 廣島順子（静岡県立沼津聴覚特別支援学校） 松本末男（聴覚障害者教育福祉協会）
指定討論者	齋藤佐和（筑波大学） 鎌田ルリ子（筑波大学附属聴覚特別支援学校）

KEY WORDS: 聴覚障害 言語指導 専門性

【企画趣旨】

難聴のある幼児のことばの指導をめぐるのは近年の大きな変化として、①新生児聴覚スクリーニング（以下、新スク）の普及、②人工内耳や補聴器等聴覚補償機器の発展、③手話の早期導入、④特別支援学校（聴覚障害）の在籍児の減少、⑤教員の世代交代などがあげられる。①および②は、ことばの発達に一定の効果をもたらしていると考えられるが、教育現場からは、人工内耳を早期から装用しても、指導上の配慮は不可欠で、とくに傾聴態度の育成やことばの意味を丁寧に扱うことの必要性が指摘されている。（庄司・左藤・鎌田,2020）。③、④、⑤についても、専門性の継承や発展との関連から現場では試行錯誤が続いていると言える。このシンポジウムでは、難聴幼児のことばの発達に焦点をあてて指導者にとって必要な専門性を考えることを目指している。まず今回は聾学校幼稚部に長く関わってきた教員から、教育の場で必要とされてきた専門性の中から、これからもぜひ継承すべきことは何かという点について話題提供してもらい、次年度以降、継続した議論を進めたい。

【話題提供者の趣旨】

（庄司和史）新スクや人工内耳の普及によって、医療と教育の関係は一層重要になっている。教育現場では定年退職や人事異動によって聴覚補償に詳しい教員が聾学校を離れており、その影響で、教育対象となる子どもたちの聴覚活用の実態が担当教員間で共有されにくくなっている現状もある。聴覚補償の側面から、オーディオグラムを読むとはどういうことか、補聴器の調整状態をどう把握する必要があるか等、ことばの指導を行う際にベースとなる事柄について話題提供する。

（中泉貢一）幼稚部教員として 40 年を振り返ると、新スクによる生後数ヶ月からの早期補聴と療育の開始は革新的変化だった。以前では考えられない言語発達を遂げる子どもたちが増えた。もう一つ、人工内耳は重度の聴覚障害児にとって福音となった。しかし、この二つは保護者や教師など、育てる側のよい関わりがあって初めて効果を現す。関わり方の有り様は、二つの技術革新だけでなく、難聴幼児の教育成果を左右する普遍的な要件である。

（廣島順子）幼稚部の子どもたちの障害の多様化に合わせて、教員は指導や支援の工夫をし、対応していく必要がある。また、保護者の対応もより細やかな支援が求められる。ここで言う子どもへの指導や支援には、障害や特性などについての知識だけでなく、従来から聴覚障害児教育で行わ

れてきた指導法が基本になると思われる。もちろん、そこには教員と子どもの信頼関係が成立してこそ、教員からの働き掛けをどの子どもも受け入れてくれるのである。幼稚部の指導は、子どもを丸ごと受け止めることでしか、始まらないと考えている。

（松本末男）様々な場面で行われるやり取りを通して、子どもはことばを獲得していく。その時教師に求められるのは、子どもが何を伝えたいのかを、状況、子どもの表出（声、身振り、指さし、視線、表情、動き、手話、話しことば等）、性格、などから理解することである。子どもは、自分を理解してくれる人として教師を信頼する。この信頼関係はやり取りにおいて大事である。常に子どもを分かりたい、受け止めようという姿勢、表情、うなずきなどの行動が教師には求められる。そこからやり取りが成立する。

【指定討論者の趣旨】

（齋藤佐和）幼児期、特にことばを育てる時期は、聴覚活用、コミュニケーション確立、言語習得に関わる専門性が最も必要とされる時期である。新生児期からの発見、聴覚補償法の進展、多様なコミュニケーション手段の併用に特徴づけられる現代こそ、日常の自然なやりとりの中でことばを育てる専門性の継承と発展が必要である。また医療との連携比重の大きい時期であるところから、特に言語聴覚士との役割分担、協働を通して信頼関係を形成していくことも今日的な要請だと言える。

（鎌田ルリ子）子どもへの温かいまなざし、成長を捉える観察力、健やかな成長を促す働きかけは、幼児にかかわる者に何より最優先して求められ資質であろう。専門領域とする補聴、発音・発語指導、言語指導に関わる知識・技能は、普遍的な内容だけでなく日々進展する最前線の内容までもが必要とされ、変化の激しい今の時代、教員一人の研鑽では対応することはできない。実践をこつこつ積み重ねることを得意とする幼稚部教員ではあるが、他者と協働するコミュニケーション力もまた重要な専門性であろう。学校全体の専門性の維持・継承のために何が必要なのかを話題提供を参考に考えたい。

（文献）

庄司・左藤・鎌田（2020）人工内耳装用児の学習状況等に関する全国調査の報告－特別支援学校（聴覚障害）幼稚部について－。聴覚障害秋号, Vol.75（通巻 783）。

(SHOJI Masashi, MATSUMOTO Sueo, HIROSHIMA Junko, NAKAIZUMI Kouichi, SAITO Sawa, KAMATA Ruriko)